

日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触 —— 日本に住み、働きつづける日本留学経験者 D の場合 ——

How the Contact with Japan Appears in the Trajectory of Life of a Japanese Language Learner: Case Study of Ex-Oversea Student D Who Keeps Living and Working in Japan

丸山千歌・小澤伊久美
MARUYAMA Chika, OZAWA Ikumi

〔要旨〕

2018年に「出入国管理及び難民認定法」が改正され（入国管理局、2018）、2019年は「日本語教育の推進に関する法律」が公布・施行されるなど（文化庁、2019）、日本社会では急速に多文化・多言語化に向かう動きがある。このような時代において、非日本語母語話者である日本語学習者が「日本語・日本社会と向き合って生きていこう」と考えるに至る径路や、そこに影響を与える要因を明らかにすることは、知日派の育成を考える上で重要である。

そこで、本研究は、PAC分析法とTEAを用いて、日本での1年の交換留学を経て大学を卒業してから日本に住み、働き続けることを選択して数年以上経過している元日本語学習者が、日本での日本語学習や経験をどのように意味づけているかを考察する。結論として、研究開始当初はTEAで言う等至点（EFP）を「日本や日本語と関わりを持ち続けて、日本で生活し続けること」と想定し、歴史のご招待（Historical Structured Inviting: HSI）（安田・サトウ、2017）に基づき協力者Dを研究協力者として「お招き」した。そして、インタビューを続け、分析を重ねる中で、第2の等至点（2nd EFP）として「日本に住まないとしても、日本や日本語と関わって生き続ける」を設定するに至った。本稿では、この分析の内容を示すとともに、今後日本語教育関係者が日本語学習を促す上で意識すべきことについて提案する。

Key word: 日本留学、サブカルチャー、日本語学習、卒業後の進路、日本社会との関係を維持



1. はじめに

2018年に「出入国管理及び難民認定法」が改正され（入国管理局、2018）、2019年は「日本語教育の推進に関する法律」が公布・施行されるなど（文化庁、2019）、日本社会では急速に多文化・多言語化に向かう動きがある。このような時代において、非日本語母語話者である日本語学習者が「日本語・日本社会と向き合って生きていこう」と考えるに至る径路や、そこに影響を与える要因を明らかにすることは、知日派の育成を考える上で重要である。

丸山・小澤（2018、2019a）は上の背景を踏まえ、個人別態度構造分析（PAC分析法）（内藤、2002）と、人間の文化的発達を非可逆的時間と文化社会的文脈との関係の中で捉え、記述するための方法論的枠組みである複線径路・等至性アプローチ（TEA）（安田・サトウ、2017）を組み合わせて、日本での1年の交換留学を経て大学を卒業し、日本に住み、働き続けることを選択して数年以上経過した元日本語学習者が、日本での日本語学習や経験をどのように意味づけているかを分析している。本研究は、元日本語学習者Dを取り上げ、文化心理学の考えに基づき、日本への留学経験を持つ日本語学習者らの人生の径路の解明を試みる。

2. 先行研究

本研究は、丸山・小澤（2018、2019）と同様に、学習者要因を通時的に捉えることを試みる。学習者要因とは、第二言語習得において学習者間の違いを生み出すと考えられる原因のことで（JACET SLA研究会、2000：45）、林（2005）では、この学習者要因の下位分類の整理がなされている。学習者要因に関連する研究は、日本語教育においては文野他（2006）や有川（2010）、丸山・小澤（2011a、2011b）などがある。丸山・小澤（2011a、2011b）は、日本語学習者が日本語教材とどのように向き合うかという観点から、PAC分析法を活用した学習者要因に関する研究で、日本への留学前の留学経験の有無が、日本語学習者の主体的な読みを促す一つの鍵となることや、ステレオタイプの教材の読み取りは留学をすることだけでは変わらず、むしろ留学中の接触体験の深さと新味が、日本語学習者の批判的な視点を持った、主体的な読みを促す鍵になるということを示した。

文化心理学では「個人が日常的に相互行為を行う他者や人工物（道具）」（上村、2018：277）を文化と捉え、「自己と文化とが相互に関係しながら個人が文化を創り上げる」（木戸・サトウ、2019：10）と考える。文化心理学の第一人者の一人であるヴァルシナーは、「記号」を「未来と向き合う何らかの機能をもち、過去の状態から何か新しいことへと導く何か」と定義している（木戸・サトウ、2019：36）。丸山・小澤（2018、2019）、小澤・丸山（2019a、2019b）、Ozawa and Maruyama（2019）はこの考えを取り入れた研究で、本研究もこの一連の研究に位置付けられる

本研究は、丸山・小澤（2018、2019）とは異なる選択、具体的には日本での1年の交換留学

を経て大学を卒業してから日本に住み、大学の非常勤講師、特任教員を経由して、インタビュー時は研究所の所員として勤務している、このように日本で働き続けることを選択して数年以上経過した元日本語学習者 D を対象に、PAC 分析法と TEA の両方を活用して分析を行う。

3. 方法

3.1 調査協力者の概要

調査協力者はインタビュー実施当時、地方都市の研究所に所属し、非常勤講師として大学でも教鞭をとる日本語非母語話者（以下、協力者 D）で、今後も日本・日本語と関わりながら生活を営む可能性がある。概要は表 1 の通りである。英国の大学で日本語を専攻し、交換留学により日本に 1 年滞在し、大学卒業後同時通訳のサマーコースに参加、その後、日本の大学院に進学した。大学卒業後は日本の大学に就職（特任講師×2回）し、非常勤講師として大学で働きつつ地方都市の研究所の業務委託を引き受ける。その後、その研究所に就職した。インタビューは対面で 4 回行った。研究は TEA で言う等至点（EFP）を「日本や日本語と関わりを持ち続けて、日本で生活し続けること」と想定して開始した。

表 1 協力者 D の概要

出身地	ペルー
年齢・性別	30 代・男性
職業	地方の研究所の所員、大学の非常勤講師
言語背景と日本語学習歴	イタリアにルーツのある家庭に育つ。7歳で英国移住。英国移住後は学校で英・仏語を学ぶ。大学入学前に夜間コースで日本語を学習。学部は日本研究専攻、1年の交換留学を経て学部卒業後日本語と英語の同時通訳のサマーコース（8日間）、日本の大学院（研究生を経て、別の機関の修士課程）ではメディア論・社会学を専攻。大学院卒業後、日本の大学に就職（特任講師×2回）、非常勤講師として大学で働きつつ地方都市の研究所の業務委託を引き受ける。その後、その研究所に就職。非漢字圏。
母語	スペイン語
インタビュー実施時期	1回目：2018年6月17日（約3時間半） 2回目：2018年7月10日（約2時間40分） 3回目：2018年9月2日（約2時間） 4回目：2018年12月10日（約3時間）

3.2 インタビュー方法

本研究は PAC 分析法と TEA を複合的に活用する。具体的には、協力者 D に同意を得た上で筆者らが 4 回インタビューを行った。まず 1 回目と 2 回目は PAC 分析インタビューの手法で、3 回目は TEM 図を作成するためのインタビューを、4 回目は TEM 図を確認するためのインタビューを行った。

PAC 分析法について、丸山（2016）は、調査項目の設定の自由度が各段に高い、また調査協力者が中心となるという特徴があるとしている。この特徴を生かして、丸山・小澤（2018、2019）は、インタビュー実施者と協力者とが、インタビュー実施者の協力者に期待するストーリーを共同で構築するリスク（佐藤、2015）を、PAC 分析法を活用することで低減する手順を踏んでいる。本研究も同様の理由から、TEA を研究手法の主軸に据えつつ、PAC 分析法を組み合わせる。

PAC 分析法で使用した刺激文は『わたしと日本・日本語の過去・現在・未来』と聞いて思い浮かべるのはどのようなことですか。あなたが思い浮かべたことを言葉やイメージで表してください。書くときには思いついた順に、順位の番号を付けてください。』である。

4. 結果

4.1 PAC 分析インタビューの結果

PAC 分析法インタビューは内藤（2002）の手順で進め、協力者 D は 37 の連想語を挙げた。統計処理は、重要度順に並べた各連想語の非類似度評定を SPSS version20 を用いて階層的クラスター分析にかけるといった手順をとったが、その結果描画されたデンドログラムを図 1 に示す（左の数値は各連想語の重要度順位である）。各連想語と重要度順位、印象、3 つのクラスターの名付け、全体のクラスターの名付けは表 2 の通りである。

PAC 分析インタビューで、協力者 D はこれを 3 つのクラスター（以下、CL）に分けることに同意し、各 CL を次のように名付けた。重要度順 28,37,24,34,32,36,29,33,10,31,30,35,6 の 13 項目から成る CL1 は「時代性」、同 4,18,21,22,3,19,20,16,9 の 9 項目から成る CL2 は「不安と不満」、同 7,11,5,25,2,14,23,13,17,26,12,15,27,1,8 の 15 項目から成る CL3 は「日本社会」、そして CL 全体を「私と日本の今」と名付けた。

PAC 分析インタビューは基本的に、調査協力者がまず各 CL の印象について述べ、次に CL 間の共通点や相違点についての印象を自由に話す順番で進むが、協力者 D はインタビューの冒頭で、CL 間の関係性について解釈した。具体的には、CL1 は協力者 D が見ている時代の流れを表し、CL2 と 3 は、協力者 D が捉える時代に対する協力者 D の考えという関係である。

各 CL の印象について、協力者 D は、CL1 を「時代性」と名付け、連想語をまとめて、協力者 D が現在をどのように見ているかを表しているものだと述べた。協力者 D が捉える時代性とは、日本語を勉強していたときと、今とでは、時代が急激に変わっているというもので、日本語の世界における位置づけそのものも、日本語の使い方も、日本語学習者に対する世間の扱い方も違っていると述べた。その例として、「VAPORWAVE」という連想語について、それは日本語をかつこうよく使うデザインあるいはモチーフとして使われる新しい若者の文化、つまり、サブカルチャーのことを指すと説明し、日本語の能力は要るかと言えば要らない、昭和時代の懐かしさが潜んでいるという雰囲気だけを出すために使われているものだとした。加えて、「国の言葉のがいねんは

もはやない」という連想語についても、インターネットの普及に伴い、コミュニケーションツールとしての英語が、英語圏という地理学的な概念から外れてきたのと同様に、日本語も今はデザイン的一种として使われていることが多くなってきており、今までの言語としての日本語というよりも、デザインのモチーフとして、何かビジュアルという点でも音という点でもセンスのあるものとして捉えられる時代に入っているとした。

CL2は「不安と不満」と協力者Dが名付けた連想語のまとめりである。協力者Dは自身の大学での専攻が日本研究であるが、日本語力は日本で、生活あるいは仕事を日本人と同じレベルでやる場合は、特殊な能力ではないということに気づいたと言う。日本語を獲得したからと言っても、就活などで日本人と競争する場合はどう考えても不利だと考えていて、現在は日本語プラスアルファの何かの特殊能力、すなわち、特別な知識や専門を身につける必要があると考えている。自身は大学院で社会学を研究したが、その力を発揮しているかと言えば十分ではない気がしているので、それに対する不満があり、それが「こんらん」や「毎日の不安」という連想語に表れているとした。仕事上問題があったときには、自身の日本語力による問題なのか、自身が仕事できないからなのか、それとも両方なのという気持ちがある。「白人が日本語を勉強しなくていい」

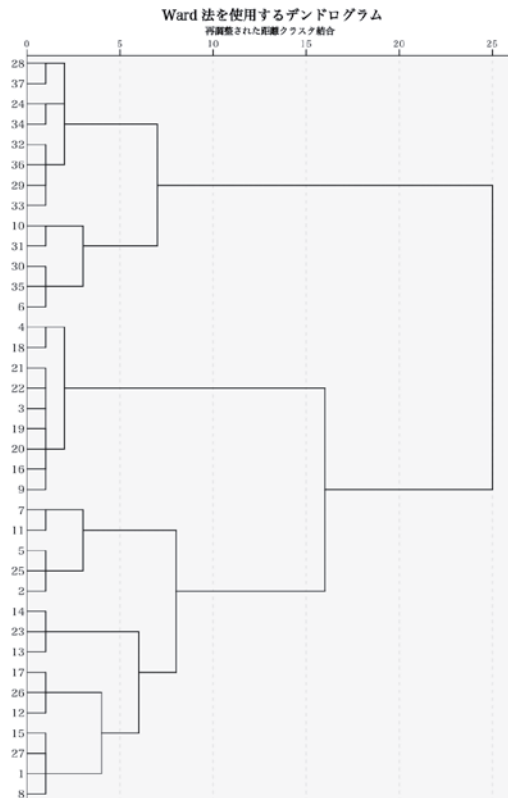


図1 協力者Dのデンドログラム
表左の数字は連想語重要度順の番号

表2 調査協力者Dの連想語と順位、印象、およびCLの名付けの内訳

CL	CL	重要度	連想語	印象
私と日本の今	時代性	28	和せい英語→外せい日本語?	0
		37	「アニメ言葉」「アニメセリフ」は日本語じゃない	0
		24	「国の言葉」のがいねんはもやはない	0
		34	日本語は「カッコイイ」という時代はおわり?	0
		32	日本語が読めない人は今どう見ているかはんだんできなくて困ってる	-
		36	ROMAJI どう表現? [※下線部分は本当は箱で囲まれている]	0
		29	"VAPORWAVE"	+
		33	20 [重要度 32] に続き (日本のイメージ全体もそう言える)	-
		10	有名・著名・現在無意味	-
		31	人材育成?	-
		30	時代のズレ	0
		35	社交性	0
		6	白人が日本語を勉強しなくても良い??	0
	不安と不満	4	単純に未だに聞きとれず、わからない単語多い	-
		18	生活のえいきょう	-
		21	通訳能力がおちている	-
		22	相手に伝わるかどうか	-
		3	わかったつもりが実はわかっていた	-
		19	こんらん	-
		20	毎日不安	-
		16	忘れる不安	-
	9	私自身にちゃんと伝わってるかどうか	-	
	日本社会	7	有利なのかどうか	0
		11	「奥さんが日本人だからね?」と言われるとくやしい	-
		5	everyone's an expert	-
		25	外国において、日本語を活かしたほうが有利?	0
		2	専門	0
		14	[microaggression]	-
		23	「あなたの国は」?→どこたえるべきか	0
		13	「海外では××はどう?」と聞かれ、自分が「海外」代表になる?	-
		17	不安×2	-
		26	ロジックギャップ	-
		12	「がんばれ」「しょうがない」はどうせいりすればいいのか	0
		15	仕事	0
		27	日本語の特ちょう→その他の言語と違って、社会のなりたちがはんえいされている→他国に戻るのが大変	0
		1	日本語専攻ということは、日本で仕事しようとする、日本人と一緒にだから、別に+面としてではない	0
8		「日本人になれない」ことを、いかにしよりするか	0	

んだと思うのは、協力者Dと似たような仕事を、海外でやっている若者たちが大勢いて、その人たちの日本語は中途半端であっても普通に海外担当などのポジションで仕事ができているからだと考えている。このようなことを言うと、「ジェラシーを感じている」んじゃないかと思われるかもしれないが、日本語を勉強したのは無駄だと感じるものが多少あると言う。アニメスタジオで仕事をするのであれば、普通にアニメの勉強をしたほうがよかった、現実には日本語とアニメの勉強の両方をやる時間がなかったと語った。専門性は必要なので、日本語というスキルを、日本以外で活用したほうがより賢い選択かもしれないと思うこともあった。

CL3「日本社会」では、協力者Dは連想語のまとまりを日本の生活のことだと述べた。一般的には「あなたの国は」「海外では何々がどう」といった「microaggression」（具体例は後述）について、自身はあまり気にしないが、気にする人は多いので、日本人の態度が変わっていかないといけないのかもしれないと語った。また、日本文化の発信を各言語で行う際に、英語版を下敷きにする傾向があることを指摘し、日本語版を下敷きして各言語版を作成するほうが良いという考えを示した。マーケットとしてはフランス、イタリア、スペインのほうが大きく、また歴史が長いのに対し、15年ほどの歴史と経験しかない英語圏が、研究者グループを編成し、いかにも正統派の、英語圏におけるポップカルチャーの拠点を作ってしまったことや、日本側が、フランス、イタリア、スペインを見ずに、英語圏しか見ていないのを残念に感じている。英語圏イコール海外といった態度は、日本があらためるべき問題だという見解を示した。

また、仕事では、よく「海外ではどう？」と聞かれるが、その「海外」は要するにアメリカということなのか、または自身がすべての国を代表しないとイケないのかわからないので、できるだけ丁寧に、自分は中東やアフリカ、アジア諸国は分からないこと、南米、アメリカは多少分かるし、イギリスは80年代なら分かるということを伝えたと相手はあきれてしまうと言う。相手としてはシンプルなことを聞いたつもりでも、実際にはシンプルな答えがないということ、協力者Dは知ってもらいたい、逆に面倒くさいという印象を与えることになってしまうということを述べた。

「microaggression」は、外国人だから、また多分日本語分からないからといって特別扱いされることを好まない人が感じていることであるとした。協力者D自身はそれほど嫌だと思わないが、一生懸命勉強して、日本人と同じように暮らそうと思っている人や、日本の国籍を持っていたとしても、顔が違うからといって、マクドナルドなどで断りなく英語のメニューを渡されたりするのは嫌だと感じる人が増えていると述べた。協力者D自身も、「あなたの国は」と聞かれたときには、イギリスだと言いたくないし日本での生活が長いから、イギリスの現在の状態は分からない。さらに生まれはペルーだが、ペルー国籍はなく、イタリア国籍はあるとなると、質問した人の「あなたの国は」という質問に対して、「あなたの国」の定義をまず教えてください、となり、また面倒くさくなる。また、国に帰らないかといった質問をたまにされるが、日本で結婚して日本で長年生活しているので「帰る」という概念が自身にはない。このような例を挙げながら、日本人の素朴な態度は、ときとして「microaggression」があり、また事態の複雑さが想

定できていないことがあることを指摘した。

次に CL 間の関係について見る。CL1「時代性」と CL2「不安と不満」は CL1 が協力者 D 自身の意見が入っているかもしれないが時代の変化についての話で、CL2 が協力者 D の内面的なものであるという違いがあるが、この 2 つは関連が強く、CL1 から CL2 に思考が流れていくとした。次に CL1 と CL3 については、CL1 が時代の変化の話であるのに対し、CL3 は CL1 とは直接つながらない内容であり、また、以前からあったが、協力者 D 自身が気づくのが遅かった課題だとした。また CL2 と CL3 は、CL2 が内面的な内容であるのに対し、CL3 が事実である点が異なる。この 2 つは関連が強いが、思考の流れとしては CL3 から CL2 に流れていくとした。

調査協力者は CL 全体を「私と日本の今」とし、CL1 を体験して、CL3 の事実気づいた結果、CL2 の気持ちになると述べた。

CL 間の関係についての発話から、大学で日本研究を専攻し日本で家庭を持ち、日本での生活が長くなった協力者 D が、サブカルチャーにおける時代の変化を体感しながら (CL1)、日本で仕事を続ける中で自身の専攻について考えるようになり、日本語を専攻した者が日本で仕事することは、日本人と同条件で働くことを意味するから、自身の専門性がとりたててプラスに働くことはないのだと思ひ至り (CL3)、仕事や仕事上のコミュニケーションに不安や不満を持つことがある (CL2) という姿が見えてくる。

協力者 D の日本語学習への取り組みは、CL に関する質問の後の、個別の連想語に関する質問の中で表れた。例えば CL1 の連想語 27「アニメ言葉アニメセリフは日本語じゃない」についてである。協力者 D は大学時代の日本語学習について次のように語り、生活の様々な場面を日本語環境にして、長時間日本語に接触するような努力をしている。

僕が日本語を勉強してるときに、やっぱり授業、私の場合は毎日授業があったんですけど、でも、毎日といっても、1時間か2時間だけの、毎日だけじゃ足りないわけですよ。環境づくりからやらないといけないから、日本人の友達と話したりするのももちろん大事なんですけど、日本の映画とか日本のアニメとかを、後ろに流せばなしにして、とにかく脳と耳がサウンドに慣れるという環境づくりをしていたんですね。ただし、気づいたのが、アニメに出てくるセリフは、必ず日本語、あるいは一般的な日本の会話で使われてるフレーズではないんですね。それ使ってみて初めて知ったんですよ。だから、いろんな人に迷惑かけたと思いますけど。

また、「目的はそれをマスターするためなので、とにかく常にやっていないと駄目だと、ひたすら思ってた」とし、日本語環境を作る努力は日本語習得のためだったと述懐している。

こういった学習を協力者 D は「むしろそれが好き」で、「日本に興味を持った」からかもしれないが、「何度も見てある場面とかある状況においては、こういうフレーズが使われるんだと思った」という。そして試しに使ってみると日本人の相手に「どこで覚えたのそれ」と聞かれたり

して、本人としてはどこでもいいから、合っているのかという確認したら、「うん、そう、そういう意味なんだ」「あ、やっぱりそうなんだ」というやりとりがあり、このように実地で試して使い方を確認し、表現が日本語教科書に出てきていたと述べた。本人としては教授法を考えてこのような学習を進めてきたわけではないが、「よく考えたらそういうふうに英語も覚えたわけですよ」と述べ、7歳で移住し英語を習得したときの、「ひたすらテレビとかそういうのを見てただけで、それをまねすることで似たような状況が実の世界で生じたら、このときはこういうふうに言うんですね」という経験を生かして、「頭の中で訳してるんじゃないくて、この場面でこうやって言うんだ」ということを「多分赤ちゃんが初めての言葉を学ぶ」ときと同じように学習をしたと述べている。

現在は、大学で学生から「英語を勉強する方法は何がいいんですか」とよく聞かれるが、「常に(目標言語に接触する)環境を作っておかないと、脳は自然にはなれないですよ。私がやっている授業は大体、週に1回か週に2回だけなので、それじゃ駄目なんだよ。ほんとに学びたいのか、それとも単位だけが欲しいのかというのをまず考えて」と答えるようにしていると述べている。このような述懐から、学習者Dが目標言語である日本語習得のために環境設定を含め、あらゆる面で不断の努力を重ねてきたことがわかる。

日本語教育の経験が長い筆者らがインタビューをしても、協力者Dの日本語力は非言語部分を含め卓越していることが一目瞭然であったが、そのような協力者Dであっても、現状の仕事や自身の専門性についての葛藤があることが発話から読み取れる。インタビュー時の協力者Dの意識が、どのような経験に基づいているかを丁寧に見ていくために、TEM図を描くためのインタビューを2回実施した。次節ではこれらのインタビューを踏まえて作成されたTEM図を示し、分析を行う。

4.2 TEM図に基づく分析

4.2.1 分析のための枠組み

まず、TEM図を描く上で必要な概念は、等至点(Equifinality Point: EFP)、第2の等至点(2nd Equifinality Point: 2nd EFP)、両極化した等至点(Polarized Equifinality Point: P-EFP)、分岐点(Bifurcation Point: BFP)、必須通過点(Obligatory Passage Point: OPP)、社会的方向付け(Social Direction: SD)、社会的助勢(Social Guidance: SG)の5点である(安田・サトウ、2012)。本研究における概念の意味は表3の通りである。

4.2.2 日本・日本語と関わって生きることに對する協力者Dの意識の変容

以下は、本研究が分析の対象としたTEM図の凡例(図2)と、協力者DのTEM図(図3)である。

協力者DがEFP「日本や日本語と関係を持ち続けて生きる」に至るまでの経験をTEM図(図3)に表し、TEM図の全体像を下の第I期から第V期の5つの期間に区分した。

表3 TEM 図に関わる諸概念と本研究における具体的概念

概念	本研究における具体的意味
等至点 (EFP)	日本や日本語と関わりを持ち続けて、日本で生活し続けること
両極化した等至点 (P-EFP)	日本や日本語と関わりを持ち続けて日本で生活し続けることを諦める
第2の等至点 (2 nd EFP)	日本や日本語と関わって生き続ける
分岐点 (BFP)	① ロンドンのおばを訪問 ② アメリカにいる友達を訪問 ③ 日本に行こうと思う ④ イギリスの大学に入学
必須通過点 (OPP)	① 日本がいいと思う ② 日本に留学 ③ 日本でやっていける、日本で生活していきたいと思う
社会的方向付け (SD)	① 日本旅行中の体験：日本人なのに日本のアニメを知らない ② 日本での交換留学中の経験：日本の企業で働くのは嫌 ③ 日本は自分のいいものを大事にしないのか：エルドラドのオリジナルがない ④ 好きなものが全部ゴミ扱い ⑤ 交換留学中も日本の良さを伝える ⑥ 努力をしても理解がない人との差が縮まらない、仲間がいない ⑦ 日本人でなくても日本風のコンテンツが作れるようになってきたし、海外のニーズに合わせることができる ⑧ 周囲の反応（学生やコンテンツビジネス関係者、クリエイター、クールジャパン政策など）：自分が頑張っても変わらない
社会的助勢 (SG)	1. 家庭環境：「ペルーは卒業する国」叔父・叔母 2. 社会環境：「ペルー以外の国はみんな偉いんだ」世の中みな輸入品、解像度悪い白黒TVでアメリカのロケット打ち上げを見る等 3. 社会環境：日本の物との接触が多い（ファミコン他） 4. 社会環境：日本アニメと出会う（南米TVコンテンツの在り方） 5. 個人の性格：映像表現に関心（コマ割、CMなど） 6. 気候や風土：ロンドンでは寒くて暗い、アニメは子どもっぽいと扱われたショック（TVや友達の扱い） 7. アメリカ版アニメへの幻滅：アメリカ主導のトランスフォーマーはダメだ。 8. 母親の仕事：ユーロスターで訪仏、日本漫画専門店で購入物 9. アメリカ訪問：ペルー時代の母の友人宅へ。ファミコンがあってそればかり。 10. アメリカ訪問：ユニバーサルに行って感動。Back to the future のアニメ版の存在も感動「なぜイギリスにないの」、Xmen は深い 11. アメコミ専門店に行き、セル画のコレオグラフィーとの出会い 12. 日本旅行中の体験：美しい日本の風景 13. 絵のクラス：アニメ好きなクラスメートから情報を得る 14. Evening course：日本語と社会の関係に関心を持つ 15. 大学のクラスメート：日本語環境を作る 16. 社会環境：日本の生活は便利、治安よい、美味しい食べ物 17. 個人の性格：才能が認められても他の人ができることはしない。自分しかできないことをやりたい。生活の便利さより生きがいを求めたい。 18. 個人の性格：諦めたら起きられないぐらい落ち込むと予想がつく

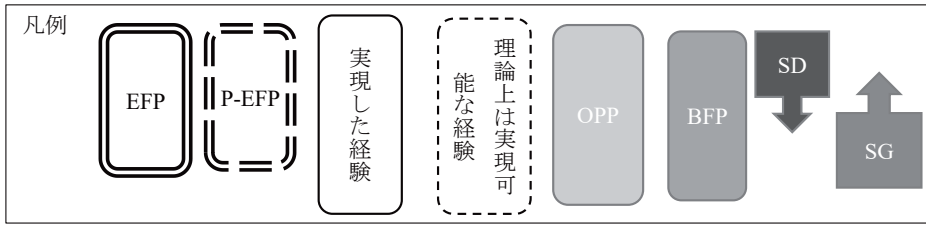


図2 凡例

- 第Ⅰ期 ペルーでの幼少期・イギリスへの移住——ペルーからロンドンのおばを訪問し、イギリスに移住するまで
- 第Ⅱ期 イギリスでの幼少期から青年期①——パリやアメリカでアニメの魅力に気づき、日本のアニメの素晴らしさに改めて感動し、日本に行こうと思うまで
- 第Ⅲ期 イギリスでの青年期②——日本を旅行して日本の言語や社会に関心を持つようになり、イギリスの大学に入学し、日本留学を決めるまで

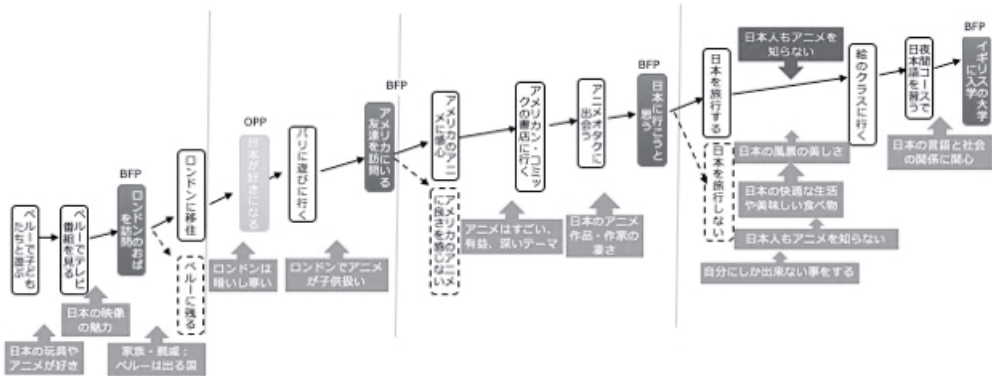


図3-1 協力者DのTEM図(1/2)

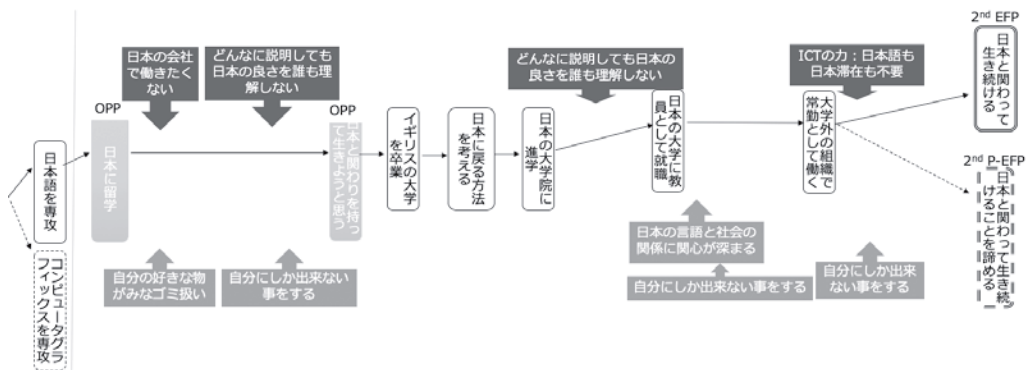


図3-2 協力者DのTEM図(2/2)

第Ⅳ期 日本滞在期——日本留学から現在まで

各区分ごとに、表3で表したBFP①～④の分析結果を中心に、協力者Dの語りを記述する。

(1) 第Ⅰ期 ペルーでの幼少期・イギリスへの移住——ペルーからロンドンのおばを訪問し、イギリスに移住するまで：BFP①以前

幼少期を過ごしたペルーは、国全体としてはテロなどで一番危険な時代だったと思うが、自身は安全な環境で生活していた。

いろいろな国のものが輸入されていることが当たり前で、アメリカのアニメ文化との接点もあったし、日本のアニメと接触する機会もあったが、5,6歳のころには日本のアニメを他と違うという感覚で観るようになっていた。いわゆる普通の子どもで、近所の友だちと外で遊ぶのも好きだったし、テレビゲームをするために友だちの家を行き来することもしていた。居住地区も家庭も富裕層で、またアメリカを頻繁に行き来する親戚がいたこともあり、現地で価格的にも手にはいりにくいおもちゃやゲームに触れる機会に恵まれていた。

親戚のおばは、富裕層であっても独立をして生活する希望を持っていて、単身イギリスに渡っており、自身が移住する少し前に、母親に連れられてイギリスに渡り、そのおばを訪ねた。おばは、ケンタッキーでアルバイトをしていた。今思うと単純労働なのだが、その当時はかわいそうとかそういう気持ちでなく「すごい」と思った。また、そのときに「先進国のおもちゃ屋」(ハムリーズ)に行き、複層階建てで、どの階にもおもちゃが積みあがっていて、当時一番流行っていたトランスフォーマーの大きなおもちゃ(ペルーにはなかなか輸入品として入ってこない珍しいもの)がサンプルとしてだれでも触れるように置いてあった。サンプルなのでさんざん子どもたちに触られて壊れていたと思うが、ペルーだと、怖くて触れないほどの高級なおもちゃ、当時の自分たちからすれば「黄金よりも価値があるもの」が、おもちゃ屋のなかで「普通にごみ扱い」されていることについて、「なんか国が違うな」とショックを受けた。

その後、7歳でイギリスに移住したときには、「先進国のおもちゃ屋」には自分自身が同じような反応をしなかった。それは自分が「大人にならなかった」から。先進国のおもちゃやアニメはブームになると新しいものが出続けるが、子どもたちが求めているものが出続けているかどうかは別だと思う。それに、先進国のおもちゃやアニメがペルーにローカライズするまでには時間がかかる(約3年)ので、自分が心からすごいと思っていたおもちゃは、移住後の「先進国のおもちゃ屋」にはなかった。

(2) 第Ⅱ期 イギリスでの幼少期——パリやアメリカでアニメの魅力に気づくまで：BFP①～②

かつてブームになっていたおもちゃやキャラクターに魅了されつづける協力者Dは、イギリスでは、周りから「お子ちゃま」扱いをされていたが、自分自身は「実は私がみてきたものはあなたたちが今現在アニメと呼ばれているものよりは深いし複雑で、よりマチュア」だったと認識

している。

また、母親がペルーで友だち関係にあった一家が、自身のイギリス移住と同じタイミングでアメリカに移住した関係で、アメリカを旅行する機会があった。そこで、ディズニールンドやユニバーサルスタジオに出かけたが、ユニバーサルスタジオはまさに「私の世界」ですばらしいと思った。現地のテレビでバックトゥザフューチャーをアニメ版で見て、ポピュラーサイエンティストたちが、すごい努力をして、エンターテイナーっぽく、科学はすごく面白いよというのを一般層に訴える努力をしているのも心を打たれた。イギリスでは、ペルーのときと同じように絵を描いたり、一緒に映画を観たりする友人ができ、彼が転校したあとも大学入学のころまでは付き合い合っていた。

また、母親がユーロスターで働いていたおかげで、フランスに度々出かける機会に恵まれていた。イギリスで入手できない日本のCDや日本語で書かれた輸入本が置いてある店が多く、普通のニューススタンドでもフランス語に翻訳されている漫画や日本のアニメの情報誌も売っていて、日本のサブカルチャーに接する機会ができていた。

そのような経験の中で、ペルーで触れていた日本のデザインは「こんなに進んじゃったか、おれが見てないうちにとまって」最先端の日本へ見に行こうと思うようになった。

(3) 第Ⅲ期 イギリスでの青年期①——アニメに魅了され、日本のアニメに出会い日本に行こうと思うまで：BFP ②～③

大学に入る半年から1年前くらいのころ、4月に初めて旅行で日本を訪れた。そのころは日本へ単身で行くことは一般人はまずしなかったことなので、旅行者が実験的に出したプログラムに参加した。四国エクスプローラーというプログラムで、すべての必要なチケットや切符がパッケージになっているもので、母親と二人で参加した。いろんな美しい風景があり、町の風景もすごく好きだった。一つだけ気に入らなかったのは、協力者Dが期待していた「みんながアニメが好き」といった雰囲気になかったことだった。協力者Dとしては、イギリスのVHSデッキをどのリージョンでも再生できるようなものをわざわざ買っているのだから、せっかく日本に来たのだから、日本のVHSテープやレーザーディスクも手に入れたいと思ったが、現地（四国）の日本人と話すと、レーザーディスクとは何かを知らない。かつてはどのお店にも売ってたじゃないかと思うが、その宝を忘れ去ってしまっている。日本の社会というより、日本で生活している日本人の考え方、意識に驚いた。すばらしい文化があふれているし、それに囲まれて生きているのに、それに気づいていない。まさに、その、英語の表現の「can't see the forest for the trees」という表現がぴったりの国だなと思った。アニメをはじめとするサブカルチャーの資源が豊富だからこそ、そのすばらしさに目を向けていないと思った。

(3) 第Ⅲ期 イギリスでの青年期②——日本を旅行して日本の言語や社会に関心を持つようになり、イギリスの大学に入学し、日本留学を決めるまで：BFP ③～④

しかし、その後で思ったのは、「日本にはいっぱいあるからこそ気がつかないし、気がつかない人が多いけど、コアな人は深くなる」ということだった。その「仮説」が、先の日本の大学院での研究につながった。日本人のサブカルチャーへの認識の現状はわかったが、自身としては人生の中でどのようなことがやりたいか、つまり日本のアニメで何かをやりたいということがそのころだいたい決まっていた。あきらめていたら何も残らないし、現地の日本人でさえも日本のアニメのすばらしさを知らない人が多いのであれば、自分が教えたいという気持ちを持つようになった。それでイギリスの大学に進学することにした。専攻は、表象することへの強い関心があり、コンピュータグラフィックスとする可能性も考えたが、選考に落ち、結果的に日本研究になった。

(4) 第Ⅳ期 日本滞在期——日本留学から現在まで：BFP ④以降

当時は、日本のアニメを世界に伝えていくには、まだ日本語が必要な時代で、大学時代は、まず「日本語をもっと上手に」と思って努力した。現地の日本人でさえも日本のアニメのすばらしさを知らない人が多いのであれば、自分が教えたいという気持ちがあるのは、前も今も変わらない。好きだからやっているというよりは「自分なりに正しいと思うものに変えたい」という思いで取り組んでいる。

こういった思いは、大学進学後の交換留学時代にもあった。ある先生の授業で、あなたの好きな漫画について書いたり、発表したり、グループでディスカッションする活動があったが、自身は、ドラえもんやミッキーマウス、『バガボンド』といった皆に知られているものではなく、「実際にみんな知らないから、これを伝えたいんだという気持ちで」取り組んだ。結果として『バガボンド』などは聞き手の反応がよかったが、自分の発信についてはそうでもなかった。しかし、本来、発信というのはみんなが反論なくいいというものを発信するものでなく、「実際にみんな知らないから、これを伝えたい」と思って発信するものだと思う。それで、自身としてはますます頑張らなくてはと思うようになった。同様の経験を交換留学時代には何度かした。

しかし、日本と関わりを持って生きようということそのころ思うようになって、大学を卒業した。大学卒業後は、日本に戻る方法を考えて、日本の大学院に進学した。大学院でも、就職後も同様の経験をしている。

現在は時代が進み、アニメーターも全部日本のアニメスタイル、動きやデザインも完璧に再現できるのだがクリエイターはみんな外国人だという時代に入っている。しかし、日本国内の業界がこの現実をどれだけ意識しているのかはわからない。日本のコンテンツのニーズが世界にあるし、日本の強いところは今、漫画アニメだと政府が言っていて、確かにそうだと思うが、現在は日本人じゃなくても日本風のコンテンツは作れるようになっていて、海外の人のほうが海外のニーズに合わせるができる。日本にはそれに対する危機感はあるのか、というディスカッション

ョンをしないといけないのだがそれができていない。

自身が好きなものや問題意識を持つものは「全部ごみ扱い」のようになるのは、もう慣れてきたが、慣れていても、仲間がつかない限り、あきらめなくなる時もある。気持ち的には落ち込むが、本当にあきらめてしまったら残るものはないし、自身にはあきらめるという概念はない。ではどういう行動になるかというといったん日本を離れることだと思う。可能性は無限だから、あきらめられないが、自身に対して消極的な態度をとる人たちと接することをあきらめるという意味であつたら、日本を離れてもいいかもしれないとここ1年ぐらいは、考えてはいる。今は、自身のような考えを持っている人たちは海外では、結構出始めていて、日本のものを全部吸収して、日本に頼らず特に日本の官僚的なこととかに従わなくてもクリエイターを中心に、面白いものを作ろうよという若手の会社が随所ででき始めている。では、どこに行けばいいのかというのが問題として残っている。

以上のように、協力者Dは、幼少期にアメリカや日本のアニメに触れ、そのデザインの素晴らしさに感銘し、その後イギリス、フランス、アメリカ、日本など、地域によって日本のアニメの評価の仕方、扱われ方、普及具合が違うことを実地で経験し、「ほかの人が知らないものを自分が伝えていく」「自分なりに正しいと思うものに変えたい」「あきらめない」という強い信念をもって人生を切り開いてきた。そして、日本語は、ほかの人が知らないものを深く理解し、伝えるための重要な道具であった。しかし、現在は日本語の位置づけや機能が変わったという時代の推移についての認識を持つに至り、日本語をほかの人にない、特異な能力として発揮させ、自分のやりたいことをするには、日本を離れてもいいのかもしれないという迷いを持つようになっていく。「日本のアニメで何かやりたい」、すなわち日本とつながって生きるという点は依然として変わっていないことがわかる。

4.2.3 日本・日本語と関わって生きることに對する協力者Dの径路に影響を与えたSDおよびSG

本節ではどのような経験が日本・日本語と関わって生きることに影響を与えているのかを考察するために、協力者Dの意識の変容に影響を与えたと思われるSDとSGを見ていく(表3)。

まずSDは、日本で働き生活するという強い希望の実現を阻害した要因である。協力者Dにとっては、「日本旅行中の体験：日本人なのに日本のアニメを知らない」「日本での交換留学中の経験：日本の企業で働くのは嫌」「日本は自分のいいものを大事にしないのか：エルドラドのオリジナルがない」「好きなものが全部ごみ扱い」「交換留学中も日本の良さを伝える」「努力をしても理解がない人との差が縮まらない、仲間がいない」「日本人でなくても日本風のコンテンツが作れるようになってきたし、海外のニーズに合わせることができる」「周囲の反応(学生やコンテンツビジネス関係者、クリエイター、クールジャパン政策など)：自分が頑張っても変わらない」の8つがSDである。

これらを大きく分類すると、協力者Dが、価値があると感じるものに対して周囲が同様の評

価としていないということと時代の流れに対する認識に分かれる。「日本旅行中の体験：日本人なのに日本のアニメを知らない」「日本は自分のいいものを大事にしないのか：エルドラドのオリジナルがない」「好きなものが全部ゴミ扱い」「交換留学中も日本の良さを伝える」「努力をしても理解がない人との差が縮まらない、仲間がいない」「周囲の反応（学生やコンテンツビジネス関係者、クリエイター、クールジャパン政策など）：自分が頑張っても変わらない」がこれに該当する。また、時代の流れに対する認識は「日本人でなくても日本風のコンテンツが作れるようになってきたし、海外のニーズに合わせることが出来る」が該当する。この2つと異なるのが「日本での交換留学中の経験：日本の企業で働くのは嫌」である。大学時代に自身の生き方の方向性として日本のアニメと何らかの関係をもって生きていくと心に決めた協力者Dが、交換留学中に持った日本社会での働き方についての認識である。

一方、SGは「家庭環境「ペルーは卒業する国」叔父・叔母」「社会環境「ペルー以外の国はみんな偉いんだ」世の中みな輸入品、解像度悪い白黒TVでアメリカのロケット打ち上げを見る等」「社会環境：日本の物との接触が多い（ファミコン他）」「社会環境：日本アニメと出会う（南米TVコンテンツの在り方）」「個人の性格：映像表現に関心（コマ割、CMなど）」「気候や風土：ロンドンでは寒くて暗い、アニメは子どもっぽいと扱われたショック（TVや友達の扱い）」「アメリカ版アニメへの幻滅：アメリカ主導のトランスフォーマーはダメだ」「母親の仕事：ユーロスターで訪仏、日本漫画専門店で買い物」「アメリカ訪問：ペルー時代の母の友人宅へ。ファミコンがあってそればかり」「アメリカ訪問：ユニバーサルに行って感動。Back to the futureのアニメ版の存在も感動『なぜイギリスにないの』、Xmenは深い」「アメコミ専門店に行き、セル画のコレオグラフィーとの出会い」「日本旅行中の体験：美しい日本の風景」「絵のクラス：アニメ好きなクラスメートから情報を得る」「Evening course：日本語と社会の関係に関心を持つ」「大学のクラスメート：日本語環境を作る」「社会環境：日本の生活は便利、治安よい、美味しい食べ物」「個人の性格：才能が認められても他の人ができることはしない。自分しかできないことをやりたい。生活の便利さより生きがいを求めたい」「個人の性格：諦めたら起きられないぐらい落ち込むと予想がつく」の16項目がある。これらは、出身国ペルーから外に向かわせるもの、また日本の良さに気づくきっかけを与えてくれるものと、日本やアメリカンの文化の良さを評価する協力者Dの感性、その中でも特に日本に向かわせるもの、そして本人の資質・性格に分類できる。

まず出身国ペルーから外に向かわせるもの、また日本の良さに気づくきっかけを与えてくれるものとしては、「家庭環境：「ペルーは卒業する国」叔父・叔母」「社会環境：「ペルー以外の国はみんな偉いんだ」世の中みな輸入品、解像度悪い白黒TVでアメリカのロケット打ち上げを見る等」「母親の仕事：ユーロスターで訪仏、日本漫画専門店で買い物」「アメリカ訪問：ペルー時代の母の友人宅へ。ファミコンがあってそればかり」「アメリカ訪問：ユニバーサルに行って感動。Back to the futureのアニメ版の存在も感動「なぜイギリスにないの』、Xmenは深い」「アメコミ専門店に行き、セル画のコレオグラフィーとの出会い」が該当する。また、日本やアメリカンの文化の良さを評価する協力者Dの感性「社会環境：日本の物との接触が多い（ファミコン他）」

「社会環境：日本アニメと出会う（南米 TV コンテンツの在り方）」「個人の性格：映像表現に関心（コマ割、CM など）」があるが、それをさらに日本に照準を当てるのが日本の良さに気づききっかけを与える SD で、「アメリカ版アニメへの幻滅：アメリカ主導のトランスフォーマーはダメだ」「日本旅行中の体験：美しい日本の風景」「絵のクラス：アニメ好きなクラスメートから情報を得る」「Evening course：日本語と社会の関係に関心を持つ」「大学のクラスメート：日本語環境を作る」「社会環境：日本の生活は便利、治安よい、美味しい食べ物」が該当する。この SD により、協力者 D は、日本と関係した形で生きていくことに魅かれている。

これまで見てきた通り、協力者 D は自身の意見や考えがどの段階でも周囲に受け入れられてきた印象を持っていないが、それでもなお自身の進む方向を貫く努力ができていのは本人の資質と個人の性格で、これらは「才能が認められても他の人ができることはしない。自分しかできないことをやりたい。生活の便利さより生きがいを求めたい」「個人の性格：諦めたら起きられないぐらい落ち込むと予想がつく」といった語が位置付けられる。

5. 考察とまとめ

本稿は PAC 分析インタビューと TEM により協力者 D が EFP 「日本や日本語と関係を持ち続けて生きる」に至る径路を分析し、日本・日本語と関わって生きることに対する調査協力者 D の径路に影響を与えた SD および SG を捉えた。

筆者らは、本研究について、EFP を「日本や日本語と関わりを持ち続けて、日本で生活し続けること」と想定して研究を開始し、歴史のご招待（Historical Structured Inviting: HSI）（安田他、2017）に基づき協力者 D を研究協力者として「お招き」したが、インタビューを続ける中で、協力者 D は、日本のアニメと関係をもって生きていくことを心に決めている一方で、時代の推移を認識することで、活躍の場が日本でなくともいいかもしれないという考えを持つようになった。このような協力者 D の考えは筆者らが想定した EFP と異なることから、本研究は協力者にとっての EFP である第 2 の等至点、すなわち 2nd EFP を設定して TEM 図を描く必要があると考えるに至り、これを日本に住まないとしても、「日本や日本語と関わって生き続ける」と設定することとした。

本研究は、日本での 1 年の交換留学を経て大学を卒業し、日本に住み、働き続けることを選択して数年以上経過した元日本語学習者が、日本での日本語学習や経験をどのように意味づけているかを分析してしようとしたものである。本研究から見えてきたのは、丸山・小澤（2018、2019）との共通点としては日本に住むことの魅力であるが、相違点は、インターネットが発達し、言語の枠組みが地理的な枠組みでは説明できなくなりつつある現在における日本のサブカルチャーの動向と、発信者としての元日本語学習者が活躍するフィールドを模索する姿である。元日本語学習者にとって強く関わりたいのは日本や日本のサブカルチャー、あるいはより広く日本の表象文化であるが、それに関わり活躍することで自己実現を果たす上で、日本に定住する必要性が

あるかどうかも含めて模索しているということがわかった。

入管法の改正（入国管理局、2018）を受けて、日本語教育の領域からは、日本語教員の専門性についての声が大きくなっている（石井、2019）が、本研究は、日本社会が迎える日本語非母語話者が捉える日本のサブカルチャーの可能性や、取り組みについての課題を日本社会がしっかりと受け止められていない可能性があることと、協力者Dのように日本とアメリカ以外の複数の現場を知った上で、日本文化の発信の可能性を議論しようとしている人財が活躍する場をどのように創出していくかといった課題であることを示した。

日本文化をめぐる世界の状況が時々刻々と変化している現在、日本語教育担当者がその現実を認識した上で、日本語学習者のキャリア形成を視野に入れながらどのように日本語学習を促していくかが一つの課題となっていることについて示唆を与えている。日本語教育に従事する者は、単に日本語教育の提供のみを考えるのではなく、こうしたSGに対する理解を深め、その必要性について、受け入れに関わる多くの人々や機関に広く伝えていくことも肝要であろう。

注

本研究は科学研究費「移動して学ぶ」時代の日本語教育——留学体験の意味づけの変容」（基盤（C）課題番号 16K02824）の研究活動の一部である。

参考文献

- JACET SLA 研究会（2000）『SLA 研究と外国語教育』リーベル出版。
- 有川友子（2010）『日本留学のエスノグラフィー——インドネシア人留学生の20年』大阪大学出版会
- 石井恵理子（2019）「新年のご挨拶」日本語教育学会ウェブサイト、<http://www.nkg.or.jp/wp/wp-content/uploads/2018/12/2019shinnen.pdf>
- 上村佳世子（2018）「文化心理学」能智正博他（編）『質的心理学辞典』277 新曜社
- 小澤伊久美・丸山千歌（2019a）「留学体験を持つ日本語学習者Xが日本に住み、働き続ける径路——Xは分岐点でどのような葛藤を経験しているか——」沖縄県日本語教育研究会、琉球国際大学、2019年3月9日
- 小澤伊久美・丸山千歌（2019b）「日本に住み、働き続ける径路に表れる日本留学、日本語学習経験」（小澤伊久美との共同ポスター発表）、CAJLE2019年次大会、於カナダ、ビクトリア大学、2019年8月7日 https://www.cajle.info/wp-content/uploads/2019/09/30_CAJLE2019Proceedings_Ozawa-Ikumi-and-Maruyama.pdf
- 木戸彩恵・サトウタツヤ編（2019）『文化心理学：理論・各論・方法論』ちとせプレス
- 佐藤正則（2015）「なぜ私は学習者のライフストーリーを聴き続けるのか 日本語教師としての私の構えを記述することの意味」館岡洋子編『日本語教育のための質的研究入門 学習・教師・教室をいかに描くか』117-137 ココ出版。

- 内藤哲雄（2002）『PAC 分析実施法入門 [改訂版] 「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版。
- 入国管理局（2018）「入管法および法務省設置法改正について」『入国管理局ホームページ』http://www.immi-moj.go.jp/hourei/h30_kaisei.html（2018年12月24日アクセス）。
- 林さと子（2005）「学習者要因」日本語教育学会編『新版日本語教育事典』、710-711 大修館書店
- 文化庁（2019）「日本語教育の推進に関する法律の施行について（通知）」https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/other/suishin_houritsu/1418260.html（2020年1月7日アクセス）
- 文野峯子・浜田麻里・林さと子・福永由佳・宮崎妙子（2006）「日本語学習者と学習環境の相互作用をめぐって」『日本語教育の新たな文脈——学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性』pp.67-102
- 丸山千歌（2016）「学習者要因の分析①——PAC分析を活用した研究」徐敏民・近藤安月子編『日本学研究叢書 日語教学研究』362-384 外語教学与研究出版社
- 丸山千歌・小澤伊久美（2011a）「日本語学習者が読解教材から連想するイメージ——PAC分析法を活用した留学前・中・後の縦断研究から——」2011年度異文化間教育学会第32回大会、於お茶の水女子大学、2011年6月11日（発表抄録集154-155）
- 丸山千歌・小澤伊久美（2011b）「ステレオタイプの読解教材に学習者の留学経験はいかに反応するか——日本語学習者に対するPAC分析法による縦断的研究からの示唆——」『日語学研究』、徐敏民編、華東師範大学出版社、203-213
- 丸山千歌・小澤伊久美（2018）「ある翻訳者が自立に至る径路——移動して学ぶ時代の日本語教育への示唆——」『立教日本語教育センター紀要』1, 19-35.
- 丸山千歌・小澤伊久美（2019）「日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触——日本に住み、働きつづける日本留学経験者Bの場合——」『立教日本語教育センター紀要』2, 19-38.
- 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編（2015）『ワードマップ TEA 理論編』新曜社.
- 安田裕子・サトウタツヤ編（2012）『TEM でわかる人生の経路——質的研究の新展開』誠信書房.
- 安田裕子・サトウタツヤ編（2017）『TEM でひろがる社会実装——ライフの充実を支援する』誠信書房.
- Lehmann, O.V. & Valsiner, J. (Eds.) (2017). *Deep Experiencing: Dialogues Within the Self*. Cham, CH: Springer.
- Ozawa, I. & Maruyama, C. (2019). "The Trajectory of an Ex-Student of Japanese Language on Choosing Japan as the Place of Living." The 1st Transnational Meeting on TEA, at Ritsumeikan University OIC, Mar. 2nd, 2019.

